
お守りの鈴

椎名美里

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

お守りの鈴

【Nコード】

N1798F

【作者名】

椎名美里

【あらすじ】

おばあちゃんが死んじゃう・・・！自転車をこぐ由美子は、おばあちゃんにそっくりのおばあさんと出会う。おばあさんの孫は最近死んでしまったというのだが・・・！？

由美子は商店街を自転車で走っていた。

（あれ・・・わたし、何してるんだっけ？今まで・・・すごく、急いでいたような・・・。）

自転車に乗って商店街をすり抜けて、駅に行つて、電車に乗って家に帰る。

それは由美子のいつもの通学コースだった。

チリン

（・・・あ。）

由美子は自転車を止めた。

それは、ある人が目に入ったからだ。

「おばあちゃん・・・？」

商店街に設置されたベンチに座る人。

それは、この前死んでしまったおばあちゃんに似ていた。

そっくりだったので、つい、話しかけたくなった由美子。

「こんにちは。」

わたしが話しかけると、おばあさんは少し驚いたように目を見開いた後、

優しく微笑んで、

「こんにちは。」

と言った。

おばあさんはみかんを食べているところだった。

「良い天気ですね。」

「そうだねえ。」

（ああ、やっぱり。おばあちゃんと一緒にいるみたい。）

「しばらくここに一緒にいても良いですか？」

「ええ、いいですよ。わたしも、嬉しいわあ。」

おばあさんは本当に嬉しそうに微笑んだ。

「おばあちゃん……。」「

由美子はおばあさんとおばあちゃんがどうしてもだぶって見えた。

「おや・・・？」

するとおばあさんは驚いたようにつぶやいたが、なぜだか嬉しそうに笑った。

「おばあちゃんって呼んでもいいですか？」

由美子は意を決して言った。

「ええ。いいですよ。・・・由美子ちゃん。」

不意に由美子の名前が呼ばれた。

「!？」

(名前まだ言っていないのに・・・。)

チリン

由美子の胸ポケットに入っている携帯についている、お守りの鈴が鳴った。

お守りには「由美子」と書かれている。

(ああ・・・これを見たのね。)

そのお守りは、由美子のおばあさんが作ってくれた、いわば形見だ。

（・・・形見。うん、形見だよね？・・・おばあちゃん、死んじゃったんだよね。）

由美子は確認するように問いかけた。

「由美子ちゃんは、中学生なのね・・・。」

それから、おばあさんと、他愛もない世間話をした由美子。

「おばあちゃんにはお孫さんはいらっしやいますか？」

由美子はおばあさんに尋ねた。

「ええ。・・・いたわ・・・。ちょうど、あなたくらいの女の子だったのよ。」

おばあさんは悲しそうに、由美子の顔を目を細めて見つめた。

「えっ？・・・亡くなられたんですか？」

由美子は驚いた。

「そうなのよ・・・つい最近ね。・・・。」

「ごめんなさい。・・・聞いてしまつて。」

由美子はいらい思いをさせてしまったと思い、謝った。

「あやまらないでくれ。わたしは由美子ちゃんに会えてとても嬉しいんですからね。」

おばあちゃんはそういつて、由美子の頭を優しくなでた。

（本当に・・・おばあちゃんみたい・・・。）

なんだか本当のおばあちゃんのように思えた由美子は、嬉しそうに話し始めた。

「おばあちゃん、聞いて！わたし、今日のテスト満点だったの！！」

由美子は自慢げに言った。

「まあ、そうなの。すごいわね。由美子ちゃんはがんばっているのねえ。」

「・・・！」

「どうしたのかしら？」

「こつやって、ほめてくれるの、おばあちゃんだけなの。」

由美子の両親は厳しく、満点なんて当たり前といった、褒めてくれなかった。

唯一、がんばったわね。とほめてくれるのが、おばあちゃんだった。

「由美子ちゃんは頑張っているのでしょうか？」

だから結果が伴うのですよ。人は才能だけで結果は残せませんからねえ。」

それはいつも、おばあちゃんが言うことと一緒にだった。

「わたしの孫もね・・・、可愛くて優しくて、頑張りやさんで、自慢の孫だったのよ。」

おばあさんも誇らしげに孫について語った。

「・・・おばあちゃんの孫って、何て名前なの？」

由美子はすぐ、気になった。

なんだか、聞かなくてはいけない気持ちになった。

「・・・由美子。」

「えっ!？」

おばあさんの口から出たのは、自分と同じ名前。

「由美子って言うの。わたしの可愛い孫はね。」

由美子を見つめて、微笑むおばあさん。

チリン

「・・・おばあちゃん・・・?」

おばあちゃんとおばあさんが、同一人物である。

由美子の結論はそこに至った。

「ふふふ。由美子ちゃんは相変わらず鈍感ねえ。」

「おばあちゃんっ!!」

由美子は泣きながらおばあちゃんにしがみついた。

「まあまあ、泣き虫な由美子ちゃん。」

おばあちゃんは愛しそうに由美子を抱きしめる。

「どうして・・・!?!?おばあちゃんはもう・・・。」

(死んでしまったはず・・・。)

「そうよ。死んでしまったわね。」

「じゃあ、どうして?」

由美子が尋ねると、おばあちゃんはみるみる悲しそうな顔をして言った。

「・・・由美子ちゃんも、死んでしまったのよ。」

「え・・・?」

「ここで、自転車に乗っているところを、トラックにひかれたんで
すってね……。」

「……。」

（……そうだった。わたしは、……ここでもう死んだんだ。）

「あの時、おばあちゃんが死んじゃうって聞いて、急いでいて……。」

すべての事実を思い出して、由美子は言った。

「やっぱり……、わたしのせいで、由美子ちゃんは……。」

「ちがうよっ!!おばあちゃんのせいじゃない!おばあちゃんのせいじゃないよお!!」

由美子は力一杯首を振って、否定した。

「……由美子ちゃんは、やっぱり優しいこだねえ。」

おばあちゃんも、目に涙を浮かべていた。

「おばあちゃん。ごめんねっ!最期に会えなくて。」

「いっぱい……、おばあちゃんに言いたいことがあったの!!」

「わたしですよ……。だからこうして、逢えたのでしょうねえ。」

「

「おばあちゃん！！今まで本当にありがとうっ！・・・おばあちゃん、大好き！！」

「わたしも、由美子ちゃんの事が大好きですよ・・・。」

だから、由美子ちゃんのもと、長生きしておくれ・・・。」

「えっ！？」

フツと、おばあちゃんの体が薄くなっていた。

「大人になって、夢を叶えておくれ。」

「おばあちゃん！？」

由美子は驚いておばあちゃんの腕をつかもうとしたが、つかめなかった。

チリン

「『由美子ちゃんがずっと元気でいられますように。』」

それは、おばあちゃんがお守りを由美子に渡した時に言った言葉だった。

「！？」

『……ずっと幸せでいてくれ、……大好きな、由美子ちゃん・
』

由美子は商店街を自転車で走っていた。

（急がないとっ！おばあちゃんが……！）

ふと、商店街のベンチに、おばあちゃんが見えた。

（おばあちゃん！？）

急ブレーキをかける由美子。

ブロオオーツ

由美子の目の前を、トラックが猛スピードで通りすぎる。

ブレーキを掛けなければ、由美子は確実に死んでいた。

（……あ、危なかった……。）

あつげにとられていた由美子だったが、意識を取り戻してベンチを見た。

（あれ？おばあちゃん？・・・確かに、今、そのベンチに・・・。）

もうすでに、おばあちゃんの姿はなかった。

（おばあちゃんが・・・、助けてくれたのかな・・・？）

チリン

由美子はそう思っておばあちゃんのお守りをぎゅっと握りしめた。

（後書き）

とっさに思いついて、一夜で書き上げたシロモノです。
お気に召してください。．．。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1798f/>

お守りの鈴

2010年12月16日14時15分発行